

# 中国台頭の背後に

——いかに「富強」から「文明」へ方向転換するか

許紀霖（訳：王俊文）

今日では、中国の台頭はもう願望ではなく、事実になっていきます。昨年、イギリスでマーティン・ジャックの本「中国が世界を支配する時——中国の台頭と西方世界の没落」が出版されました。この本は大きな反響を呼んで、中国でも訳本が出ました。マーティン・ジャックは中国問題の専門家です。彼によると、二〇五〇年には中国は世界の指導権を握り、世界を統治するようになり、人民元は全世界でドルに取って代わって「世界貨幣」になるといいます。また、上海はニューヨークの代わり世界の金融センターになり、中国語は英語と同様に全世界で使われるようになります。孔子もプラトン並に世界の人々がみな彼の經典を勉強しなければならないようになるそうです。昔イギリスは海上の覇者であり、アメリカは空と経済の覇者でしたが、二〇五〇年頃には中国は文化の覇者になって、その文明によって世界を統治するとマーティン・ジャックは断言しています。

中国は今日すでに世界という舞台の中心に向かって歩んでいます。しかし、中国がどの方向に発展し続けるのか、この問

題は世界を当惑させています。中国の元駐フランス大使吳建民氏は、中国は今や世界舞台の中心まで進んでいるのに、世界はそのことを受け入れる準備ができていないし、中国自身もつと準備を欠いていると述べております。本来、鄧小平が策定した国策は「目立たないようにして、出しゃばらず」（「韬光養晦、不出頭」）、周縁の立場に甘んじ、集中して経済建設に取り組むというものです。二〇〇八年に金融危機が勃発し、西方世界が衰退し始めているのに対して、中国は高速発展を続けていることから、世界は急に中国に注目してきました。中国はアメリカと同じくらい重要な大国になりました。ところが、それはどんな大国でしょうか。マーティン・ジャックによれば中国は文明大国として勃興するそうですが、中国の文明とはどのような文明なのでしょうか。

中国がどこへ歩んで行くかを知るために、まず中国はどこから歩んできたかを理解しなければなりません。歴史学者として、今日私は清朝末期以後の中国の歴史から講演を進めたいと思います。延々一世紀半の富強の夢にはどのような歴史経験や



許紀霖 [Xu Jilin]

1957年生まれ。  
華東師範大学歴史系教授。  
中国近現代思想史。

許紀霖氏は近現代中国における知識人の役割や位置をめぐる優れた研究で国際的にも著名な思想家であるばかりでなく、今日の中国の論壇、知識人界に大きな影響をあたえているオピニオン・リーダーの一人でもある。今回、愛知大学現代中国学会は科研費基盤研究(B)「世紀交替期中国の文化転形に関する言説分析的研究」プロジェクトと共催で許紀霖氏をお招きし、2010年3月16日、愛知大学車道校舎で講演していただいた。講演後、許氏の共同研究者である羅鋼氏・倪文尖氏（いずれも華東師範大学中文系）に補足的なコメントいただき、質疑応答も行った。ここでは講演の際の原稿を訳出した。（砂山幸雄）

教訓があるのか、つまり歴史をもって未来を展望することによって、中国の台頭の意味について考えてみたいと思いま

す。  
今回の講演は三つの方面について述べましょう。第一は清末以来の大国への夢は二つの夢を含んでいたということですが、一つは富強の夢、もう一つは文明の夢です。しかし、近代中国の歴史の大部分では、ずっと一つの夢がもう一つの夢を覆い隠す状態になっていた、つまり富強の夢が文明の夢を圧倒していました。第二は富強の夢の背後

には、上から下までみな信仰しているイデオロギーがあったという事です。それは一九世紀末、中国に輸入された「優勝劣敗、適者生存」の社会ダーウィニズム（社会ダーウィン主義、社会進化論）です。このイデオロギーは大きく中国社会や中国人の精神状態を変え、また中国の現実を作り上げたわけです。第三に、中国が台頭した後、最も核心になる問題はいかに富強から文明へ歩むかということです。中国にとっては、どのような文明が適切なのでしょう。世界の主流の価値から離れないと同時に、中国の特色を持つ文明とはどのようなものなのでしょうか。

### 一 社会ダーウィニズムはいかに中国を変えたか

富強は一種の追求ですから、この追求には精神の動力が要ります。それは富を作りたいという強烈な欲望です。競争と努力によって自分の運命を変え、より多くの物質的財産を獲得したいという果てしない内心の欲望です。これはゲーテが描いた、近代的人間ならではのファウスト精神です。私はこの数年間ヨーロッパ、アジア、北アメリカの多くの国を訪問しましたが、この永遠に満足しない富への欲望すなわちファウスト精神は最初西欧で出現したものの、二一世紀前後になると、なんと華人社会の中でこそ最も強く表れているということを発見しました。昔の中国人はこのようではありませんでした。孔子の末裔として、「義」を重んじて「利」を軽んずる儒教の徒として、中国人は物質や生活を軽視せず、金銭も重視はするもの

の、富裕自体になんらかの内在的な価値があるとは思っておりませんでした。富裕は大同の理想を実現する手段に過ぎず、個人生活の小康〔中流程度の個人生活〕、つまり一定の恒産〔固定資産〕を持つのは、ただ恒心〔利益にとらわれない安定した心境〕を持つため、個人の徳性を養成するためです。一体いつから中国人は生まれ変わったかのごとく徹底的に変身し、調和を説く代わりに競争を重視し、法家の富国强兵理論を信じ、永遠に満足しない欲望の追求を信じるようになったのでしょうか。

この変化は清末から始まったのです。日清戦争で日本に負けてから、中国の士大夫たちは目覚め始めました。彼らは学生だった日本がそれまで先生だった大清帝国を破ることができたのは、脱亜入欧を目指して調和を重んじなくなり、代わりに競争、優勝劣敗の重視へと転向したためだ、ということを見ました。そして、一九世紀末になって進化論は敵復によって中国に紹介され、たちまち一世を風靡しまして、中国人の新しい世界観と価値観になりました。ダーウインの進化論は自然界の進化を研究対象としております。彼にはたくさんの信徒がいましましたが、例えば、トーマス・ハクスリーは人類の進化は自然界の進化と異なり、人類社会の独特の倫理規則に従うと論じております。もう一人の信徒、スペンサーは「社会ダーウィニズム」を編み出し、生物の競争、適者生存という進化論の法則は自然界に適用するだけではなく、人類社会の進化にも適用できると主張しております。面白いことに、敵復が訳したのはハクスリーの『天演論』であるのに、訳本で紹介されているのはス

ペンサーの社会ダーウィニズムです。進化論が中国に輸入されてから、全中国はそのため沸き立ちまして、みなは競争が世界の公理であり、競争によるしか国家の復興も、個人の進歩もありえないと信じるようになりました。

社会ダーウィニズムは新しい宇宙観でした。それは昔の儒家の宇宙観とどういう違いがあったのでしょうか。儒家の宇宙観の核心は倫理道德であり、天には徳性があるので人類社会も調和的な倫理道德を守らなければならないとしています。ところが、進化論は違います。進化論の基礎はニュートンの機械的な宇宙論であり、世界の核心はもう徳ではなくて力であり、調和ではなくて競争となります。重要なのはだれが力、物質的な実力や他人より強い生存能力があるのか、ということなのです。このような様々な力さえ持ち合わせれば、競争の勝者になります。日清戦争以降、全中国では商工業によって国を豊かにする「工商富国」の論調が登場しました。清末の知識人である楊度は、金鉄主義を唱えました。金は黄金、つまり経済によって民を豊かにする、商工業を發展させようということです。鉄は軍事の象徴であり、つまり富国强兵の道で行かなければならないということなのです。楊度が見習ったのは当時のドイツの鉄血宰相ビスマルクです。

清末から今日までこの追求は中断したことがありません。清朝から中華民国、そして中華人民共和国まで、目指した理想の文明はそれぞれ異なっていたにもかかわらず、たとえ「文革」時代ですら、一つのことだけは諦めてはいません。すなわち富

強、社会主義の強国を建設したいという願望です。富強の夢の裏には一つの原動力がありました。それはすなわち競争です。このような強権の世界で自分の居場所を確保するには、実力がなければなりません、競争がなければなりません。

清末の梁啓超は『強権論』という文章を書きました。彼によると、世界には強権しかない、強者が弱者を支配することが世界の公理であり、世界は強者しか認めないといえます。この觀念は清末から今日まで続き、今後も広がり続けると思われます。中国人は昔から「権力」と「権利」という二つの概念を混同しています。権利は平等的であり、権力は不平等です。ところが、中国の歴史は権利の伝統が欠けており、地位が高いほど権力が大きい、手に入れる特権も多くなります。清末以後の競争は特権と強権を奪い取るためであり、皆は平等の権利を追求するより、他人を凌ぐ強権を獲得したかったです。強権しか認めない今日の世界では、富強は激しい競争の結果のように見えます。国が富強であるほど、民衆が豊かであるほど、社会の不平等はかえって深刻になり、平等の人権からますます遠ざかり、強権の論理はますます横暴に振る舞います。

洋務運動の時期、重心はやはり「物質救国」にあり、物（軍隊組織・機械工業）を重視していました。康有為・梁啓超の維新運動になると、重点は「人間」に変わりました。梁啓超・嚴復らは、西洋の強さの原因は比べようがないほど圧倒的な物質力以外に、より重要なのは人民が能力、競争力を持っているからだと感じました。昔の儒家の伝統が人間の道徳力を重んじ

ていたのに対して、いまや人間の能力、いわゆる「核心的競争力」の強調に転じました。「核心的競争力」とは何でしょうか。それには三種類あります。道徳力や知力、体力です。道徳力と知識でさえ競争力のたぐいになってしまいました。この三つの面とも優れている学生が、競争力のある人間だと見なされます。従って、今の中国の大学はもう昔の書院や古典的な大学のように自由な人格の養成、豊かな学識に重きを置いてはいません。社会での競争力を身に付けさせるという実用的、功利的な目的に変化してしまいました。

スペンサーの社会ダーウィニズムはひとことで言うと、「早く頑張らないとおしまいだ」ということです。清末から今日まで、中国社会に充満しているのはこのような空前絶後の競争的な雰囲気です。これはまったく中国人を変えてしまつて、その強大な精神動力を支えています。この緊張感の裏にあるのは、立ち遅れに対する恐怖であり、淘汰されることに對する恐怖であり、さらに、富強になりたい、人の上に立つ人になりたいという欲望です。個人の運命を変えようとするなら、まず能力抜群の人にならなければなりません。国家が立ち遅れているために他国に虐げられている状況を変えようとするなら、同じくまづ強くならなければならない、西洋と同様な物質力、国民の生存能力や競争力を持たなければなりません。

## 二 どうして富強は文明を圧倒したか

中国の大国への夢の内容には「富強」のほか、もう一つ、

「文明」があります。清末以後、嚴復、梁啓超といった啓蒙者や先覚者は文明をも提唱しています。彼らは西洋の強さ、また日本が中華帝國を打ち負かしたのは富強以外に、隠された要因として文明があることを発見しました。彼らは西洋が伝統的中華文明より高度な近代文明を持っていると考え、その文明が彼らの理想の一つにもなりました。

それでは、どうして結局富強は文明を圧倒してしまつたのでしょうか。まず富強と文明の相違点を見てみましょう。富強は三つの内容を含んでいます。一つ目は洋務運動で追求する物質競争力、二つ目は先ほど触れた国民の競争能力、そして三つ目は制度的な合理化、あるいは理性化ということです。清末の政治改革運動から最近三〇年間の改革開放まで、制度は不断に変革されてきました。制度の改革はいつたい富強のカテゴリーに属するのでしょうか、それとも文明のカテゴリーに属するのでしょうか。これは改革がどの程度まで進められたか、によります。もし改革が制度を決定づける核心価値に触れない、制度の基本的な構造を改めようとはしないで、ただ制度をよりうまく、有効に運営し、制度の行政能力を高めるだけなら、この改革は文明とは関係がありません。ドイツの大思想家マックス・ウェーバーの分析によると、これは制度の合理化あるいは理性化と呼ばれるものです。

制度の合理化は現代社会の核心的な内容であり、二つの特徴を持っています。一つはコストと利益の比率を計算する会計制度であり、もう一つは中性的、非人格化的で、ヒエラルキー的

な官僚制です。前者は会計学であり、後者は公共管理学です。

この制度的秘密によつて現代社会は効率的に機能し、強大な競争力を持つようになりました。しかも、このような効率と理性を重視する制度的合理化は、様々なイデオロギーや政治体制と結合できます。資本主義社会でも活躍できるし、社会主義社会でも活用できます。富強、グローバル化への参入、効率の向上や核心競争力の獲得などを目指すなら、誰でもこの制度的合理化の方向に改革しなければなりません。制度的合理化とは、国家と社会のすべての機構や団体、具体的に言えば、行政・司法機関、軍隊から工場、商社、さらには学校、社会团体まで、企業の制度を用いて配置し直したり改革したりすることです。いわゆる「白い猫でも黒い猫でも、ネズミを捕まえさえすればいい猫だ」（鄧小平の名言）ということですが、一九世紀末から二一世紀初めまで、中国の改革は中断したことはありませんが、ほとんどの改革が文明問題と価値問題に関わっていないように、政治参加の基礎や政治の正統性の拡大とも関係がありません。改革の目的はただ制度の競争力を高め、富強の夢を実現するためです。このような改革は非政治化、脱価値化の政治改革です。

富強とは対照的に、文明は一種の価値観です。近代文明の秘密を、嚴復は早くも一九世紀末にはっきり見抜きました。つまり「自由を基本として、民主で補う」ということです。自由であれ、民主であれ、共に近代の価値観です。自由と民主が価値観であると言うのは、自由と民主が人類の生活において最も追

求する値打ちがある目標であり、かけがえない内在価値を持つているからです。自由と民主の社会のなかでしか、人間は尊厳が守られる人間的な生活を過ごせないのです。これこそ文明的な生活です。

もちろん、富強もまた追求すべき価値です。しかし、富強と文明とはどちらがより価値があるのでしょうか。清末の嚴復と梁啓超は、西洋が中国に勝った理由は富強だけではなく、文明もあるからだと分かっていました。文明は根本的な解決をはかることができるので、とても重要です。しかし、当時の中国は国力があまりに衰えていて、亡国の危機に瀕していました。文明ではこの急場を救えません。富強は一時的な解決しかできないが、国運を挽回することができます。どちらのほうが大事かと色々考えたとすえ、やはり富強のほうがより重要だという結論になりました。当時の中国にとって最も切羽詰まった課題は、立ち遅れているために虐げられる状況を変え、一刻も早く富国強兵を実現して国民の競争力を高めることでした。文明という目標は後回しにしてもいいというわけです。中国に多大の影響を与えた日本の啓蒙思想家福沢諭吉の言い方でいうと、文明は究極の目標であるが、現段階では国家の独立と富強を実現するための手段であるに過ぎず、手段的な価値しか持っていないでした。

当時、富強が文明を圧倒したのには、もう一つの原因があります。それは西洋のもつ「二つの顔」の問題です。戊戌変法以降、中国は西洋を先生として学ぶようになりました。しかし、

この先生はいつも学生を虐めていました。第二次アヘン戦争（アロー戦争）の際、円明園を焼き払ってしまいました。西洋文明が足を踏み入れたところは、どこでも血と火になりました。このことは中国の知識人を非常に困惑させました。楊度は清末において最も思慮深い士大夫の一人でした。彼は当時の世界には文明国家はあるものの、文明世界はない、世界各国はそれぞれ国内で文明を唱えるのに、国外では野蛮な行爲を行っていることを発見しました。楊度の観察は正確です。西洋の政治学には、このような公然の秘密があります。国内的にはロッキン主義を掲げて自由平等を説く一方で、対外的にはトマス・ホッブズ主義によって生存至上、弱肉強食というジャングルの法則に従います。

西洋世界の東方への拡張の裏には、文明にかかわる理由があります。つまり、自分たちはあなたがたより高度の文明を持っている、自分たちの拡張は文明人の野蛮人に対する征服であるということとです。西洋の文明は野蛮な拡張によって実現されたのです。従って「近代」の西洋には、複雑に交錯している二つの顔があります。今日の中国の自由主義者は西洋人のもつ自由文明の一面を強調するのに対して、新左派は西洋人の野蛮な拡張と侵略の側面に批判の目を向けます。文明と野蛮という二つの顔は西洋の内部においても絶えず衝突し、緊張をはらんでいます。今日では、文明の側面が強化されてきて、その一方で植民地主義の野蛮な側面はしだいに正当性を失って、隠れたかたちでしか存在できなくなりました。しかし、一九世紀の頃には

西洋人は露骨な強権的手段や野蛮な方法を用いて文明を押し広めていたわけです。

西洋の両面性に対して、楊度はこう考えました。西洋に両面性がある以上、我々も両面性で対処しなければならぬ、我々が今遭遇している国は文明国であり、我々も文明的にならなければ立国できない。しかし我々が今いる世界は野蛮な世界であり、野蛮でなければ生存できない、と。言い換えれば、中国は相手のやり方に対し、同じやり方で対応しなければならぬ、文明をもって文明に対抗し、野蛮をもって野蛮に対抗するというわけです。国内で文明を唱え、国外で野蛮に振る舞うという論理を究極までつきつめると、外交が内政を決定するという結果になります。当時の中国にとっては、国家と民族の滅亡の危機を乗り越えることが当面の急務でした。そのために、富強は文明より急務であると見なされたのです。

昨年中国では『中国の機嫌はよくない』というベストセラーが出ました。その作者たちもこの論理の持ち主です。彼らはアメリカを最も主要な外敵と見なし、中国は今「韬晦」つまり能力を隠して目立たないようにするという政策を止めるべきである、言いたいことを言い、したいことをすればいいと言います。さらに、彼らには必要な外部の圧力を獲得するため、民族を覚醒させるために、中国はもう一度戦争に負けなければならぬとさえ主張します。『中国の機嫌はよくない』の作者たちは反西洋の急先鋒のように見えます。しかし、実は彼らは西洋に学んだ最も優秀な学生であり、しかも習ったのは野蛮という一

九世紀、二〇世紀前半の西洋文明の最もよくない部分、野蛮の部分です。いわゆる「青は藍より出て藍に及ばず」です。なぜかという、あの時代の西洋の野蛮性はまた文明の一面によって制約されていました。しかし、『中国の機嫌はよくない』という本が真似たのは西洋の強権の論理でしかありません。それは「剣を持って商売する」というものであり、西洋の文明的価値のほうは欲しがらないからです。

もし二〇五〇年に本当にマティン・ジャックが予言したように、中国がアメリカを圧倒し世界の覇者・支配者になるなら、それはどのような勝利でしょうか。中国文明の勝利でしょうか、それとも西洋精神の勝利でしょうか。もしかしら、その時、西洋人はこう笑うかもしれません。あなたは実力面で我々を征服したと思っているが、実は我々の文明に征服されたのだ、しかもすでに時代遅れになってしまった、最も卑劣な一九世紀帝国主義精神に征服されたのだ、と。そうです。もし二〇五〇年の時点で中国が自由・民主を核心とする近代文明を棄て、一九世紀西洋の富強精神しか学んでいかなかったとしたら、たとえ中国が世界の支配者になったとしても、結局、精神面の勝利者は依然として西洋です。もし強いてこれを中国文明の勝利だと強弁したいなら、その中国文明とは「外見の美と実質がよく調和している」「文質彬彬」儒家の文明ではなく、富国強兵に熱中する法家の文明だということになるでしょう。

中国と外国の歴史は我々に次のようなことを教えてくれます。文明不在の富強は恐ろしい富強であり、短命な富強であ

り、見かけは強そうですが実がもろくて弱い、魂のない野蛮な力です。来年は辛亥革命百周年ですが、中華民國も短命の政権でした。どうして短命だったのでしょうか。それは民国の誕生の初めから文明が解体され、強権しか認めなかったからです。魯迅先生は当時辛辣な指摘をしました。おおよその意味は、奴隸所有者に支配されるのはまだましだが、奴隸が支配するようになるのとさらにひどい、というものです。民国初期の中国社会は秩序が乱れ、まるでジャングル世界のように弱肉強食の法則に従っていました。兵隊や兵器や金を持っている勢力が天下を制しました。まさに「政権は武力によって打ち立てられる」(「政権は鉄砲から生まれる」という毛沢東の名言)です。二〇世紀前後の中国に辜鴻銘（カウフンミン）という文化的怪傑がいます。彼は早くも清末に中国が文明の下り坂を降りているのに気がつきました。曾國藩は洋務運動の草分けであり、彼はまた修身と経世の両方とも重んじていました。曾國藩の人材を選ぶ基準には才能だけではなく、道徳力も含まれていました。ところが曾國藩の弟子李鴻章となると、道徳力は才能に及ばず、道徳上数多くの非難を受けました。第三代の袁世凱はもつとひどくて、目的のためなら手段を選ばず、権勢を中心としてすべてを処理しました。清末、辜鴻銘は張之洞の幕僚でしたが、張之洞が「中国の伝統思想を本体とし、西洋の科学技術を導入しよう」(「中学を体とし、西学を用とする」と提唱しても、辜は賛成しませんでした。彼はこう指摘します。西洋文明はキリスト教とマキャベリズムの交雑で生まれた怪物であり、最後には権勢重視のマ

キャベリズムが道徳重視のキリスト教を必ず圧倒する。あなた(張)はまだ道徳心があるので「中体西用論」を維持できるかもしれないが、袁世凱のような卑劣な者が権力を握ると、中国に対する危害は卑俗な李鴻章より大きい、と。この指摘がなされたのはまだ清朝の時です。残念なことに凶星でした。若き中華民國は袁世凱の手に落ち、軍人と有力者が政権を握り、中華民國は最初からこのような政治伝統を持つようになってしまいました。袁世凱も、その反対者であった孫文とともに権勢を妄信し、互いの理想こそ異なるものの手段は同一でした。孫文は「袁世凱打倒のための」「二次革命」を起こすにあたり、国内外の軍事を借りて革命を立て直そうとして、地方の軍閥と連携し、さらに日本と交渉するために奔走しました。革命者であろうと独裁者であろうと、崇拜したのは同じ、つまり「力」でした。孫文は五四運動が勝利してからようやく悟りました。なるほど、武力に頼らずとも、近代の文明観念や知識人の動員能力に頼っても天下を征服できると。

民国初期の中国社会では、どの階層もすべて「力」という社会ターウィニズムが尊ぶものを崇拜していました。中国文明が重視してきた伝統的な倫理、道徳、価値は冷遇されました。当時、このような「力の政治」に対して、最も鋭敏な観察と最も深刻な批判を行ったのは『東方雜誌』の編集責任者であった杜亜泉（アズン）と言えるでしょう。この文化保守主義者は一九一〇年代に『東方雜誌』に十数編の文章を発表し、民国以降の中国はすでにジャングルの世界になってしまい、動物のように精神や文明

を無視して競争ばかりを重視し、弱肉強食となつてしまつたと集中的に批判しました。杜亜泉はさらにこの現象の歴史的な原因を分析します。彼によると、最も重要な原因は一九世紀末以降、欧米から中国に伝えられた唯物論が物質しか重視していないからです。その物質至上主義は最初洋務運動の富強論に現れ、続いて「天演論」、すなわちスペンサー流の社会ダーウィニズムに示されました。物質主義が人々の心に浸透してから、宇宙に神はいない、人間には魂がない、物質だけが万能であるという考え方が広がり、その上に残酷な優勝劣敗説が加えられました。このような状況においては、人生の目的とは何か、宇宙が美しいかどうかというような問題に関心を持つ人がいなくなり、すべての人が気にするのは、いかに自己保存するか、どうやって淘汰される運命を免れるかというようになりなりました。このような世界では、優劣にしか関心が向けられなくなり、善悪が問われず、教育は競争の練習場になり、激しい競争のはてに殺人主義までになつてしまいました。

百年近くが経つた今、杜亜泉の文章を読み直すと依然として強い衝撃を受けます。市場経済が興つた最初の頃、みな市場経済に対してユートピア的な想像ばかりしていました。市場経済が人々に自由と近代的民主政治をもたらしてくれると信じていたのです。しかし、市場経済はウェーバーが論じる制度的合理化の一種に過ぎず、様々な政治体制と結合できるので、よい市場経済制度もあれば悪い市場経済制度もあるということを意識しませんでした。中国が十数年間歩んできたのは最も悪い市

場経済の道です。すなわち権貴（党や政府の有力者）主導の資本主義の道です。

資本主義の裏には、永遠に満足しないファウスト精神があります。この精神は社会ダーウィニズムと結合して中国にめざましい発展と日進月歩の富強をもたらしてくれました。ところが、章太炎が言うように、歴史の進化というのは善が進化する一方で、悪もまた進化します。つまり「正義の力が強くなれば、それだけ邪悪な勢力も強くなる」ということです。社会が豊かになっていくと同時に、物質への欲望が溢れる拜金主義の社会に変わりました。人はそれぞれ独立した個体であり、お互いに隔絶して、有機的な繋がりが欠けている原子化された個人です。このような個人は基本的な生存と発展のために日々苦心惨憺しつつ壮絶な競争を繰り広げています。競争の秩序を守るために、各種の利益を超越するような絶対的権威を持つ政府が必要になります。政府の権威の正当性は、しっかりとした社会的基礎によつて保証されます。この社会的基礎とは広範囲に広まった利己主義（エゴイズム）です。ほとんどの国民は次の二種類の性格だけで概括することができます。その二種とは楊朱（中国戦国時代の思想家で、個人主義的な自愛説を主張した）か、さもなければ社会的価値を軽蔑するシニカルな犬儒（古代ギリシャの哲学者の一派で、無為自然を理想として、世俗的価値を軽蔑した）です。楊朱は徹底的な利己主義者であり、「自分のために図らない人には天地の罰が当たる」という考えを持ち、社会のために自己の利益をいささかでも犠牲にしようとは

しません。もう一部分の人々は、頭がわりと冷めており、このような社会はおかしいと見抜いているものの、社会を変えることはできないと思つて無力感に陥っています。ではどうすればいいでしょうか。結局犬儒になるしかありません。身を清く保つて悪に染まらず、個人の道徳修養のみに専念するわけです。

民国初期からすでにこのような社会が形成され始め、しかも精神と倫理の価値はますます重要視されなくなり、重要なのは衣食です。国力が強大になること、国民の生活が豊かになること、これが我々の今日の主流イデオロギーすなわち発展主義的なイデオロギーです。しかも、この発展主義的なイデオロギーは民衆の中で非常に大きな影響力を持っています。民衆の中で流行っているのは消費主義のイデオロギーです。人生は衣食のためであり、お金があれば、いい生活もできるし尊厳も得ることができます。今日の中国ではどんな人が尊厳をもっているのでしょうか。判断基準は道徳心を持っているかどうか、知識や高尚な精神を持っているかどうかというのではなく、重要なのは何のブランドの服を着ているか、車を運転しているか、どんな車を持っているか、マンションを持っているか、どんなマンションに住んでいるか、というようなことです。これらはいずれも社会に出てから人から尊重されるか否かの基準です。これらは消費主義と呼ばれます。多く消費すればするほど、高炭素生活をすればするほど、身分は高まり、尊重されます。この消費主義はちょうど国家の発展主義イデオロギーと補い合

い、場合によっては一体化しています。ところが、倫理的、精神的なもの、核心的価値とは何か、人間の生きる意義は何かなどはもう重要ではなくなつたようです。

中国はかつて「民国時代初期」このような状況に陥っていました。不幸なことにこのような歴史が今日再び繰り返されています。しかも前より一層ひどくなり、極端なカタチで繰り返されています。一世紀半のあいだ、中国はずつと強国化の夢を追いかけ続けています。これは間違つていません。今やその夢はもう実現されたようですが、もう一つのより重要なものが忘れられました。それは文明です。

### 三 中国に必要なのはどのような文明か

民国初期がこんなに混乱していたので、もちろん知識人も反省する精神を持っていました。杜亜泉に始まって、陳独秀たちもしだいにこの問題に気が付きました。彼らは富強だけではいけない、文明も必要だと認識しました。五四運動の時代、議論の核心問題は富強でもなければ啓蒙でもありませんでした。陳独秀の言葉で言うところの議論の対象となつていたのは倫理の自覚、倫理問題です。具体的に言えば我々にはどんな文明が必要か、西洋文明か、それとも中国文明と西洋文明を調和させた第三の文明か、というような問題です。しかし彼らがどんな文明を求めていたにせよ、まず私たちが見出しうるのは、五四運動の時期の最も大きな自覚とは、文明の問題が初めて重要視され、核心問題になつたということです。

昨年は五四運動の九十周年でした。五四運動を単なる愛国運動と考へてはいけません。五四運動は実際は世界主義の運動でした。運動の参加者が要求したのは中国の権利と利益だけではなく、世界天下の公理、つまり文明も要求しました。パリ講和会議が公正ではなかったのは、中国の国家利益を侵犯したためだけではなく、世界の公理に違反していたこと、しかもこの公理が西洋人によって提出されたものだったという理由にもよるのです。五四運動の学生宣言を読み直せば分かると思います。その宣言にはつきりと天下の普遍的価値、文明を求めると書いてあります。五四愛国運動の核心は実は世界主義の文明を獲得するための運動だったのです。

五四運動前後になって、強国への夢は一時的に復活しました。一世紀近く前、胡適はアメリカに留学していました。若き胡適は社会ダーウィニズムの忠実な崇拜者であり、自分の名前まで変えました（胡適は「適者生存」の適を自らの名にとつた）。アメリカに行つてから、彼はやつとこの夢から覚めました。一九一四年から一九一八年まで、ヨーロッパを主戦場に第一次世界大戦が行われていました。この戦争によって胡適は、強国の夢、富強の夢が人類にもたらすものは破滅だということとを悟つたのです。当時の日記に胡適はこう書いています。ナポレオンはかつて中国を眠れる獅子に喩え、獅子が目覚めたら世界は驚愕すると書いたという。そのため我々は今日中国を「眠れる獅子」と喩えるようになっていますが、それは妥当ではない。むしろ「眠れる美人」と呼ぶべきではないか。悠久なる

歴史を有する文明の国として、中国が世界に貢献するのは武力であるはずがない。文物風教、つまり中国の文明でなければならぬ、と。

中国の台頭はつまるところ富強から文明へ進まなければなりません。しかし問題は中国がどのような文明に進むのかということです。西洋に対抗する閉鎖的な文明か、西洋のビジョンと解け合うような開放的な文明か。もちろん中国は西洋文明の不用な追隨者になるわけがなく、普遍的な文明の規範の中で、中国自身の道を歩まなければなりません。ハンティントンが『文明の衝突と世界秩序の再創造』において、普遍的な文明に対する二種類の解釈を明確に区分しています。一つはイデオロギーの冷戦、あるいは二項対立的な「伝統と近代」という分析枠組みの中で、普遍的文明を、西洋を規範とし非西洋世界の国々が模倣するに値する文明であると解釈します。もう一つは文明の多元性という理解の枠組みの中で、普遍的文明を、それぞれの具体的な文明と文化共同体がともに認める公共価値であり、またそれぞれの文明・文化が共有したり、重層したりしている社会文化制度であると定義します。一九九〇年代半ば以前、中国の思想界がまだ冷戦的思考と近代化モデルのなかで眠っていた時、西洋中心主義は確かに一時中国人のナイーブな心を支配していました。この十年来、「反省的近代性」という考え方が登場するようになると、普遍的文明の内実も内在的変化を遂げました。西洋は東洋と同じように、たくさんの文明の中の一つに過ぎません。普遍的文明とは、それぞれの独自性を

持っている様々な文明の重なり合う部分であり、人類の平和共存と健康的な発展を実現させる基本的な価値です。普遍的文明とは変わらない固定的な要素ではなく、時代が変わり、より多くの文明が参入するにつれて、その内実も常に再構築されていきます。普遍的文明は動態的、歴史的であると同時に、その境界は決して曖昧で任意の解釈や敷衍を許すものではありません。神や天命といった様々な超越的世界が解体された後、普遍的文明は啓蒙の深い刻印を持つようになります。文明は人間の条件を守る制度的な保障であり、人間の尊厳が必要とする自由平等を守るものでもあります。その具体的な内容はすでに国連の人權規約に記され、多数の国が調印批准して、人類の核心価値となっています。

もちろん、これらの核心価値をどのように理解するか、各種の価値の実践の優先順位をどのように決めるか、それぞれの文明と国によって多様な歴史的实践がありうると思われませんが、どのようなモダニティの実験であつても、普遍的な文明の核心価値から大きく逸脱してはならず、また破壊的な挑戦になつてもいけません。どんな国でも、モダニティをめぐる試行錯誤は普遍的文明のベースラインに挑戦することはできません。その代わりになすべきことは、積極的に普遍的文明と対話を行い、世界の主流の価値と融合するなかで自らの文明の独自性を発展させ、普遍的文明の内包を拡大することです。

中国はすでに経済面の台頭を遂げました。しかし、更なる「文明的台頭」について、中国は準備を整えているでしょうか。

元朝末期、江南を手中に収めた朱元璋（農民反乱の指導者から明朝の創立者、初代皇帝となった）は一刻も早く覇を称えようとした。そこで策士の朱升に意見を求めたところ、朱升は「城壁を高く築き、食料をしっかりと貯め、王を称するのはあとにすべし」とアドバイスしました。二一世紀の中国にはチャンスと危機が共存しています。最も慎重な態度はやはり「食料をしっかりと貯め、王を称しない」に過ぎるものではありません。この「食料」とは世界の主流の価値と接続する精神文明と政治文明です。中国が王になれるかどうかについては、天命にさからうことはできないので、神様にお任せしましょう。

#### 訳注

- 〈1〉 Martin Jacques, *When China Rules the World: The Middle Kingdom and the End of the Western World*, London: Allen Lane, 2009. 中国語訳は馬丁・雅克著、張莉、劉曲訳『当中国統治世界——中国的崛起和西方世界的衰落』北京：中信出版社、二〇一〇年。
- 〈2〉 宋曉軍、王小東、黃紀蘇、宋強、劉仰『中国不高興——大時代、大目標及我們的內憂外患』江蘇人民出版社、二〇〇九年。
- 〈3〉 辜鴻銘は一八五七年、イギリス海峽植民地（現在のマレーシア）のペナンに富裕な華僑の子として生まれた。エジンバラ大学（イギリス）で西洋文学を、またライプチヒ大学（ドイツ）で土木工学を学んだのち、中国におもむき中国古典を学び、一八八五年から長く張之洞の幕僚をつとめる一方、「論語」などの四書の英訳も行った。民国成立後の一九一五年北京大学で英文学などを講じたが、五四新文化運動に反対する復古主義者であった。一九二八年没。